

平成 27 年度第 2 回博物館構想策定委員会会議概要

- 1 日 時 平成 27 年 9 月 3 日（木） 14：00～16：00
- 2 場 所 小田原市役所 3 階 301 会議室
- 3 出席者 委 員：矢島委員長、井上委員、石原委員、吉良委員、田尾委員
鳥居委員、中村委員
職 員：栢沼教育長、諸星文化部長、杉崎文化部副部長、安藤文化部副部長、大島文化財課長、諏訪間城址公園担当課長、野村サービス係長、佐々木主査、鳥居主事、鈴木主事
橋本主事、坂井主事、大貫主事、三上主査、三浦主査、小林主査
事務局：友部生涯学習課長、湯浅尊徳記念館担当副課長、岡郷土文化館係長、茂木主任、保坂主事補

4 概要

教育長挨拶

栢沼教育長より挨拶があった。

協議事項

(1) 本市にふさわしい博物館のあり方について

【矢島委員長】 お手もとの文案について、本日協議すべきところは 4 と 5 になる。1 から 3 までについては今までご議論いただいたところなので、お気づきの点があれば事務局にご連絡いただきたい。その修正を経て、次回の確認としたいと思う。1 から 3 についてはこれまでの議論を整理してもらったものになるので、ご意見はあろうと思うが、基本的には 4 と 5 についてご意見いただきたい。まず、4 と 5 の部分について、事務局よりご説明願いたい。

【友部生涯学習課長】 第 1 章から第 3 章までは、前回の会議まで一定のご協議をいただいたことから、今回はまず第 4 章、第 5 章の内容をご確認いただき、その後、改めて全体の構成をご確認いただきたい。

まず、用語の定義を、というご意見があったため、資料については博物館に収蔵するものを「博物館資料」と表現した。また、館の外にあり収蔵に適さない、なりわいや史跡、また、既存施設も含めた広い概念でとらえるものを「地域資源」と表現した。

次に「中核」という言葉の意味が取りづらいというご指摘を受け、「中核施設」という文言を、既存施設をつなげる博物館機能の中核という意味で使い、地域資源をつなぐ施設という意味では「中心」という言葉で表現した。

それでは、博物館の機能・活動の文案内容についてご説明申し上げます。

資料1の5頁、併せて資料3の3頁目をお開きいただきたい。

まず、4章の構成としまして、博物館の基本的な機能である、教育普及、調査研究、収集保管のうち、第3章の「性格」のところで触れている市内外への積極的な情報発信を受けて、教育普及から展示情報発信を別にして4つに分けた。また、既存施設をつなぐ中核であり、かつ地域資源と人をつなぐ中心であるという性格を受けて、施設間の連携や回遊の面を強調することから、「連携の推進」として節を設け、全5節での構成となっている。構成の順番だが、一般市民の方がより身近に感じられる教育普及を最初にして、以下、展示・情報発信、調査研究、収集保存、連携の推進の順となっている。

それでは、それぞれの節のご説明に移る。

「4(1)教育普及」では、博物館が教育の場であり、市民の学習活動を支援する場であるということ述べている。また、子どもの学びの場としての機能を強く打ち出した方がよいというご意見を踏まえ、子どもの学び、学校教育との連携について、特に文章を入れ込んで強調した。

また、市民協働による調査研究も盛り込むべきというご意見を受け、教育普及活動も館の職員だけでなく市民の参画も目指すことを盛り込んだ。

さらに、世代間交流の場としての博物館に、とのご意見を踏まえ、博物館が市民協働の活動の場として機能し、そこで子どもたちが学ぶという場づくりをすることで、世代間交流の場となり、活動の結果もたらされる成果も期待することを述べた。

次に「4(2)展示・情報発信」についてご説明する。

ここでは展示が博物館の性格を受けた内容となること、市内外に積極的に情報発信をしていくことについて述べている。

美術資料の取り扱いについては、歴史・考古・民俗に並ぶ4番目の柱とはならなくとも、アプローチの仕方や扱いの検討を、とのご意見があったため、歴史的に扱い得る美術資料は展示に活かしていくとしている。現代美術については「おわりに」で残される課題として整理している。また、現在郷土文化館が所蔵する自然科学系資料についても、小田原の環境を説明する上で取り扱いを考慮することを盛り込んだ。

次に「4(3)調査研究」についてご説明する。

ここでは調査研究機能について、博物館独自で行うものと、他機関の研究成果を集積すること、市民の調査研究を支援していくことの3つで整理している。市民協働の調査研究もここに入れ込み、その成果をほかの市民

が博物館独自の研究成果と同様に活用していける環境づくりをしていくことを述べている。

次に「4 (4) 収集保存」についてご説明する。

ここでは博物館活動の根幹としての収集保存機能について触れ、博物館の性格に基づいた収集方針を立てて資料の収集にあたること、集めた資料を適切に整理して保存することについて述べている。

最後に「4 (5) 連携の推進」についてご説明する。

ここでは博物館が既存施設と連携し、博物館機能の中核館として機能することで既存施設もその機能を高めていくこと、また利用者の学びに資するために、小田原の文化や歴史全体を考えるうえで、その地域資源が持つ意味をわかりやすく体系化し、利用者に紹介していくことについて述べている。

以上のように整理したので、ご意見をいただきたい。ご説明は以上である。

【矢島委員長】 特に皆様にお考えいただきたいのは、4 (2) の展示・情報発信である。既存の施設のネットワークの中心的役割を果たすとすると、それにふさわしいのはどういう展示かということがあると思う。個々の施設が特徴的な資料をもち、特徴的な展示をしているのと、中核、中心としての博物館の展示というのは、少し違ってくるのではないかと思う。そこをどのように考えるか、連携の問題も含めて影響があると思うのだが、いかがか。

【田尾委員】 前回欠席させていただいたが、大分文章をもまれたのだと思う。中核、文化観光というところがそこここに出てきているが、ネットワークのコア施設としての役割を果たすのであれば、ガイドランス的な役割というのは博物館の導入部分として設定して、それぞれの施設との連携を図るような意味を持たせ、ひとつには観光という面で言えば、市外から来たり、あるいは遠くからくる人たちのために、情報発信するというようなことで、小田原の良さを知ってもらおう。そうしたことによって評価されることがあると思うが、その評価を見て、小田原市民も小田原の良さを再発見するという考え方があるということ表現してはいかがか。そういったことによって市の活性化も図られるというような文言を入れては。

【吉良委員】 土地の選定や何年計画とするかは大きな問題だが、4 頁で博物館施設の中核としての機能を持たせるための、ネットワークづくりや資料の整理等について記している。これらは開館前から地道に行うことが必要で、博物館の基本的な事業である。市内のどこにどのような資料があり、どのように保存がなされていて、どう活用できるのかということ博物館のスタッフが努力を重ねて把握することによって、博物館はよい仕事ができるようになる。郷土文化館がこうした仕事を担っていることは承知しているが、一

方でコンスタントにソフト面の計画を練り続ける姿勢を取らない限り、ハードができて中身がないという状態になる。毎年刊行される冊子類を見ると、小田原は文化財を紹介したり、いろいろな調査報告書を出しているが、今はネットの社会なので、ネットに載せていくことと、ハードができた時にはソフトがうまく機能し、情報発信ができる、そして多くの人に来ていただく、見ていただく必要があるのではないかと。これを今だからこそ準備しなければならないと思う。計画は遠いところを目指して進めるのだが、足元から地道にというのを、どこかに入れていただいた方が、確かだろうという気がする。

【矢島委員長】 今のお話は 2 に歴史文化情報の発信というのがあるが、その拠点施設として機能する前提として早いうちからそのような取り組みを始めることを盛り込むと。

【吉良委員】 でなければ無理だと思う。ハード待ちをしても仕方がない。

【矢島委員長】 いずれにしても 2 の中には現在の情報環境を利用した積極的な情報発信という言葉は一切入ってきていないので、それは必要であろうと思う。どういう形をとるかは別として。

【友部生涯学習課長】 今のご意見なのだが、9 頁のおわりにののところなのだが、「今後、既存施設では将来の博物館整備を見据えた資料収集活動や調査研究活動等内容的充実を図ることが重要である。」という文言で書かせていただいた。ご指摘の通り 2 のところには書いていないので、記述すべき場所等ご意見をいただければと思う。

【鳥居委員】 今日は博物館の機能活動のところからで、それより前の話はしないでおうということだったのだが、前回はキーワードしか提示されておらず、その前の会議で基本構想の構成をいじらなければならないという話があったと思う。したがって、はじめにから博物館の性格までがほぼ合意ということではないと思う。吉良委員のご発言もいままでの会議が論議が尽くされていないということがあってのことと思う。今日の資料はキーワードだけではなくて、事務局の考えが反映された文章だが、この作業は基本構想をつくるという作業である。この文章を見ると基本構想なのか基本計画なのか、何の意図があってこの資料が出てきたのかよくわからない。はじめにというのはどうして基本構想をつくる作業をしているかが書かれているかと思う。博物館整備の背景は現状と課題ということになると思う。博物館整備の目的というところが、解決の方向性であると思う。これを読んでも博物館の機能・活動は、問題点があって、その解決の方向性を押さえてそれが反映されていなければどういう考えでこの博物館をつくらうというのかが、私には見えてこない。基本構想というのは進むべき方向

性を決めるものであり、目標を立て、それをどのように展開するかという大綱を示すものである。具体的な資料を羅列したり、基本計画的、実施計画的文章を入れるとなんとなく読んでしまうのだが、新しい博物館がどのような博物館を目指すのかが全く見えてこない。いまの博物館であれば、市民参画は絶対に必要である。それを大きな大綱の中に打ち出すという博物館もある。資料の収集の方向性、つまり小田原に關係する資料はできるだけ実物資料にこだわって集めようとか、そうした今後どのような博物館を目指すということが、もう少し見えてくるようなものでないと。もっと文章量は少なくてもよいと思う。これを拝見すると博物館学のキーワードをそのまま解説しているだけで、全く具体的な姿が見えてこないと私には感じられる。今の段階でこれをどうしたらいいのか。作業をするに当たっての立ち位置というか、何をつくるのかということをもう一度考えてつくらないと、なかなか難しいと思う。

細かいことを言えば、基本的な文章はきちんと書かないといけない。はじめにのところで、織豊政権期の小田原北条氏とあるが、歴史的に織豊政権期がいつから始まったかをきちんと押さえれば、後北条氏、その前身である伊勢宗瑞が戦国大名化してから何十年もたっている。こういう荒っぽい書き方をしてしまうと基本構想の信頼性が問われるところがあると思う。その下にも学校教育と社会教育の連携とあるが、社会教育から生涯教育という言葉になって10年以上経つ。資料を見ると後ろの方では生涯教育、生涯学習という言葉を使っている。もう少しきちんとつくらないといけないと感じる。また、はじめにの「しかしながら」の次の段落から「とりまとめた」までははじめにはふさわしくないのではないかと感じる。これはむしろ結びの言葉である。全体の構成の中から言うと、ちょっとわかりにくいと感じる。今日の議論の箇所、博物館の機能・活動のところだが、基本構想ということ意識して書かれているかに対する危惧を申し上げたが、基本構想であるならば、語尾の部分が「望まれる」とか「期待できる」とか、こういった書き方はおかしいと思う。小田原の博物館はこのような博物館をつくりたいとか、必要であるとか、そういう書き方にならないと、余計どういふ博物館をつくらうとしているのか見えてこない。展示・情報発信のところも「展示は、収集保存、調査研究の成果を市民に還元するもので、他の教育機関にはない博物館固有の機能・活動である」とあるが、これは大きな間違いである。展示は企業でもPRや社会還元を兼ねて展示をしているところはたくさんある。学校でも地域学習のために展示施設を持っているところはたくさんある。こうした基本的な事実誤認が入っているとかなり気になる。また、「展示・情報発信」のあと「調査研究」とひ

とくくりにしているが、これは新しい造語をしているのかわからないが、その下の「収集保存」は「収集」と「保存」は別の機能であり、別の活動である。基本的な部分を抑えて作らないと。この文章は事務局の郷土文化館でつくっているのか。

【友部生涯学習課長】

そうである。

【鳥居委員】

当然博物館学的な知識もあるだろうから、余計になんというか、私は資料をきちんとつくるのが目的だと言っているわけではない。資料を整えることが大事だとも言っていない。何がしたいのかが見える資料でないと、こういった会議が成果が出ないのではないかと危惧している。以上である。

【矢島委員長】

ほかにはいかがか。

【中村委員】

4頁までが共通の理解になっているかということだと思う。構想の中核の部分を確認してから具体論に入った方がよいのではないか。特に4のところは博物館学の概論のようで、どこでもやっていることが挙げられている。では、それぞれの、例えば教育普及の中で、小田原はどこに重点を置きたいのかが書かれていない。特に間違っていないし、悪くはないのだが、基本構想なので、ポイントを絞り、小田原の博物館をつくるためにどこに狙いを定めて、一番ゆるぎないところをというのが、私たちの議論だと思うので、はじめのところが一番大事であると思う。私が理解しているのは、はじめにのところで地域資源ということが言われていて、これは博物館概論にはない新しい概念である。これだけ大きな問題を「単に古文書や民具等の博物館資料を取り扱うだけでなく、史跡や歴史的建造物、なりわい等の施設に収めることができないものを地域資源ととらえ、活用していく視点を加え」というのが他から見て小田原ではどうしていくのか、というところが見えてくる場所であると思うので、ここはもっと議論していかなければならないと思う。博物館が本当に地域資源の核となる必要があるのかということも含めて。「単に古文書や民具等の博物館資料を取り扱うだけでなく」あるが、これが博物館の基本的なところであり、小田原でどのような古文書や民具等を取り扱っていくのかということを考えるだけでも大変なのに、言葉のあやかもしれないが「単に」で終わってしまっている。どちらかという地域資源の方に重点が置かれている書き方になっており、私はそれには批判的である。皆さんにもっと議論していただきたい。市がエコミュージアムと言われていたが、最初からその議論ならば、エコミュージアムは地域資源をつなげる核となるものなので、それはそれでいいのだが、エコミュージアムなのかという性格もあいまいなままである。だが、地域資源という言葉は頻繁に出てくるので、ここを私たちはどのように考えるのかをきちんと議論してからでないと、機能や活動に

は入れないと思うがいかがか。委員長はどうお考えか。

- 【矢島委員長】 1から3までをやらないというわけではなく、今日のこの時間では重点を置かないということである。お気づきの点等はあると思うので、そこは読み込んでいただきたい。
- 【中村委員】 1から3について、まだ共通認識に至っていないのではないか。博物館資料だけでなく、地域資源も扱っていくのだということで合意がなされていればよいが、ここについては議論が必要であろうと思う。あとのところは一般論のようなものであるので、小田原の博物館というアクセントはこのところであろうと思う。
- 【吉良委員】 総花的で、博物館学の教科書のような内容を入れたという印象である。小田原の博物館にとって何が問題とされてきたのか、それを新しい博物館の中でどう解決していくのか、どのような考えでどのようなビジョンをもって計画するのかが記される必要がある。収集保管や調査研究等の各項目においても継続的な活動をしていくということを強く訴えるのが、血肉化した基本構想だと思う。議論しなければならないところはそこだろう。現場にいる人たちは気づいていることがたくさんあるはずで、何をやれていないのかということをはじめに書いて、だからこうするということが基本構想に盛り込まれるべきである。
- 【鳥居委員】 これを読むと館の理念が全く書かれていない。博物館整備の背景を読んで思ったのは、私は小田原でつくろうとしている博物館は郷土文化館を発展的に進化させたものであろうと思っていたのだが、これを読む限りでは全部ご破算にして新しくつくろうというように読める。そこはどうか。
- 【友部生涯学習課長】 郷土文化館の発展的移行の予定である。
- 【鳥居委員】 背景が全くそのような書き方になっていない。2頁の「収蔵資料の整理も課題であり、市史編纂資料等未整理のまま収蔵されている資料もあり、目録化が進んでいないことから、市民が十分に利用できない状態にある」は、新しい博物館をつくらなくても解決できるはずである。また「さらに、複数の施設に分散して資料が収蔵され、資料についての情報が一元的に管理されておらず、情報の公開も不十分で、利用者にとって、必要な資料をどこに行けば利用できるのか、関係する資料がどこに収蔵されているかがわかりづらい状況にある」は新しい博物館というハードの問題ではなく、ソフトの問題である。そう言うのは身もふたもないので、新しい博物館をつくる際には専門知識を持った職員を入れたいということであれば新しい考え方が出てくる。なぜこんなに自虐的に問題点を羅列するのか、私にはわからない。その下の「活動についても、市立図書館や天守閣では、講座や講演会、体験教室等を行う場所が備えられておらず、このような活動を

展開することができていない。すなわち、いずれの既存施設も市民の生涯学習の振興を図る機能が充分ではない」とあるが、天守閣で本気で講座をやるつもりがあるのか。市立図書館で体験教室をしようと考えているのか。問題点の把握ができていなくて、現状解決型の博物館にしようとしているのか、どういうものをつくろうとしているのか、私にはまったくわからない。いろいろ問題はあるが、もっと市民を入れて市民参画型にしようとか、そういうことであれば一つの考え方ではあると思う。現状を分析してその解決型の博物館にしようとか。色々な博物館の形があると思うのだが、この現状と背景では、何を解決しようとしているのか。もう少しこの前段の部分を大事にしないと後の部分が展開できないような気がする。郷土文化館を発展させていくということであれば、他の館との役割を明確にしておけばよいし、連携ということを押さえておけばよい。であれば、他館との役割分担や連携について書き込めるはずである。基本構想というのはそういうもので、今後つくる博物館の憲法であると思う。方向性をもう少し明確にしないと、なかなか見えてこないと思う。他の館の基本構想はインターネットで閲覧できる。私も最近のトレンドがどこにあるか把握しなければならぬので、いろいろなところを見た。やはり、新しい博物館をつくる際にはほかの地域とは違うものをつくりたいということをどこも出している。また、現状を把握して問題点をどう解決していくのかということ、現状解決型だけだと方向性を誤ってしまうので、社会的なトレンド等をバランスを取ってどこでもつくっている。

【吉良委員】板橋区立の美術館の例だが、他館との差異化をはかろうとした学芸員がいて、あまり知られていない狩野派の絵等を収集展示して、そこから何かを見つけていこうという試みを行った。徳川家が所蔵していたような絢爛豪華な狩野派の絵等は地域の博物館では収集できないから、逆に地域の中で狩野派を追ってみようとしたら、案外面白いものが生まれ人が集まり始めた。これは発想の転換の必要性を理解している人がリーダーシップをとると賑わう博物館になるということだろう。翻って小田原市博はどう計画しようとしているのか。例えば戦国期に重点を置いてやるならやるで人を引き付けるような情熱のある視点がないと、金太郎飴のような博物館になる。総花的ではなく、情熱を血肉化させた表現がほしい。鳥居委員の言われることと少し重なるかもしれない。そういう意味では井上委員は地域密着でやられているので、ご意見はないか。

【井上委員】感想になるが、今日のところ等は私は博物館の素人で概説書を読んだくらいなので、正しい教科書的なことが書いてあり、なかなかこれについても言うのは難しい。私自身も小田原市民であり、ある面ではあまり総花

的になってしまうとまた同じようなものをつくることになってしまうので、何か小田原らしさをとと思う。ただ、極論を言えば、例えば北条氏に特化してということになれば、他のところは抜け落ちてしまうので、市役所という公的なところをつくるのであればすべて入れてすべて濃いというのがある意味で望ましいのかもしれないが、いったんそれを取り払って、対象ではなくやり方自体で小田原らしさができないのかと思う。展示に関してはいろいろなもの、歴史や民俗に関心を持っている人は大勢いるので、それは全部を取り込まなければいけないが、やり方自体が今までの受け身のものではなくて、能動的な、これからの生涯学習という意味では、受け身ではなく市民や観光客の関わり方が問われてくる。小田原らしさというのは小田原固有の的なものではなく、ほかのところにないような博物館というのはないのかな、と。構想文が細かくなってしまっているのだが、もっとアバウトでいいとは言わないが、もっとどんと出せるものがないかと個人的には思う。だからといって具体的にどうということは難しいのだが。小田原の場合、掘り起こしていくと色々ところで活動をしている方がいるので、地域で、民間でやっているところがこことどう連携するのか、そこがあってもいいと思う。なかなか行政と民間との壁はあるので、民間でいろいろやっている方たちと行政が積極的に連携していく一つの手立てとして博物館が存在してもいいかなと思う。文章をさらりと読むと納得してしまうが、そのように思った。

- 【吉良委員】 常識的に書いてあると思う。これを議論すると言われてもやりにくい。
- 【鳥居委員】 シンプルにどういう博物館をつくりたいのか、という文章でなければ論議が深まっていかない。こういう博物館の概説の文章を叩いても仕方がない。井上委員が言われたように地域の研究者を結集するような場を提供する博物館というの、他の博物館とは違うあり方になってくると思う。例えば地域の研究者と連携を取った展示をしてもいいと思う。新しいことをやるには奇をてらうのは非常に危険で、成果の期待できるものを拾ってあげていくというのは可能である。
- 【吉良委員】 持続的にやっていける。
- 【鳥居委員】 博物館経営という視点から考えても、応援団を増やすのは絶対に必要である。博物館に色々な人が来て。博物館の資産は資料だけではない。そこで働いている学芸員が色々な情報を集めて、人と人を紹介する。そういったことも博物館の魅力である。
- 【中村委員】 これをどうにかしなければいけないので、2についての議論が必要と思うが。
- 【矢島委員長】 今まで出たご意見を事務局で反映させて次の校を用意してくれると思う。

今日ははじめにから順を追ってはやっていかなかったが、前の方についても、今日ここでいただいた以外にご意見があれば、それを言うのであれば反映してもらえと思う。それを踏まえて、既存の施設をネットワーク化してその中核を担う中核館になるという考えをどう扱うか、ご意見をうかがいたい。これまではそのような考えが基調になっていたと思うが。

【鳥居委員】 郷土文化館を中心に新しい博物館をつくるということを言われているのか。

【矢島委員長】 既存の施設や、ここでは地域資源という言葉で表現されているが、そういったものの中核という意味である。

【中村委員】 博物館機能の中核という意味では委員長の言われる通りと思う。ほかに地域資源の中心と文化観光の拠点という2つの中心をつくっている。ここは独自性であると思う。地域資源をつなぐ中心としての博物館というのはエコミュージアムを除けば、そういったことをうたっている博物館はないと思うし、それを大きな機能に取り入れているところもないと思う。文化観光についても、博物館は文化観光に利するということは言われているが、拠点にするということこれは新しい考え方である。こうした今までの博物館では言わなかった新しいところのどこを取り入れて、どこを見送るかを議論しないと、バラバラに言った意見を事務局が取り入れて文章化すると、事なかれの文章になってしまう。どこにアクセントがいくかわからないから。そのためここをもう少し議論したい。ここが決まるとそこに沿った機能等、話がつながってくると思う。構想で一番大事なのは性格とか理念であると思う。そこは皆さん意見が異なると思うので、まとめるのは難しいかもしれないが、博物館構想策定委員会として何かを出さなければならないので、多数決でもなんでもいいのだが、まとめていただいて。これは諮問されているわけだから、答申しなければならない。特色あるところを議論した方がよいと思う。今日のところはまんべんなく書いてあり、なかなか議論が深まる場所ではない。また、大きいところはこの後の組織である。ここもどういった組織で運営するかという、非常に大きなことが書かれている。例えばこれを登録博物館にするのか等。また、指定管理者についても望ましくないが、施設管理については検討した方がよい等のあいまいな書き方をしているが、委員会としては直営の方がよいとか、登録博物館にしてほしいといったことを明確に出した方がよいと思う。あいまいなものでは答申にはならないと思うので。こういった意見の分かれそうなところを議論した方がよいと思う。肉づけの部分はむしろ事務局でつくっていただいてもと思う。

【吉良委員】 文化観光は前回議論が出て入ったものだと思う。

- 【中村委員】 私はそれに関しては、地域資源の中心等と同列に置かれることには抵抗がある。ここに位置付けるとすべてが影響を受ける。これから具体的に博物館をつくられると思うが、その時にとっても影響を受けることになるので特色として入れるかどうか。前はよいということになったからか。
- 【鳥居委員】 そうでもないと思う。少なくとも憲法に書き込むようなことではないのではないかと申し上げた。
- 【吉良委員】 この委員会の答申であって、意見を事務局でまとめてくれたものと思う。
- 【中村委員】 その中で認める部分と認めがたい部分は意見を述べるべきと思う。文案は事務局でおつくりになるということはあるだろうが、委員会の意見はきちんと残さなければならない。
- 【吉良委員】 本当は私たちが文章を作らなければならない。
- 【中村委員】 そうである。たたき台を事務局につくってもらっている。
- 【友部生涯学習課長】 基本的にこの文案は平成6年の時の基本構想をもとに、現在に合わせて修正の作業を行ったものである。そのため、キーワードがない、面白みがないというのはおっしゃるとおりである。もともと、郷土文化館が現在地から移転しなければならないというところからはじまっている。全くの更地に新しい博物館をこれからつくるところとはちょっと視点が違うというのはご理解いただきたい。それと、中村委員からご意見があったように基本構想であるので、ほかとは違いを出しにくいところがあるのだが、そのなかで他とは違うところをどう出していくのかということについては、観光のことをどの程度書いていくのか、教育についてはこれ以上上げるということはなくむしろあげていくというのは皆さんのご意見であろうと思うが、確かに観光についてはご議論いただいてもいいと思う。前後してしまうが、この構想が今までとどこが違うかということ、中核としての機能、中心としての機能という二重の機能を持ち、エコミュージアム、フィールドミュージアム的な視点を強く打ち出した。これは時代の要請や小田原市の特徴からが入れ込んだものである。こうしたところも賛否はあると思うが、どの程度入れていくのか、事務局としても悩んでいるところであり、ご議論いただければありがたいと思う。
- 【中村委員】 先ほどの話は大きな性格を左右するところである。エコミュージアムの性格が入ることによって、市立博物館の中核館としての性格も変わってくると思う。
- はじめにや性格のところを見ると、市民のための歴史や民俗を勉強できる博物館というだけではなくて、エコミュージアム的な地域資源のセンターにもなるし、観光の拠点ともなるといったことを、積極的に入れていくのかを議論した方がよいと思う。地域資源とあるが、これをやろうとすると

大変である。人的にもエネルギーも必要である。きちんと判断した方がよいと思う。エコミュージアムの発想は、市として持っているのか。

【友部生涯学習課長】 そうである。単館の博物館の設置だけではなく、小田原には有形無形の様々な地域資源があり、中には立ち消えてしまっていくものもある。何らかの手立てをしなければならないと考えている。

【中村委員】 かなり欲張っていると感じる。既存施設もあり、それらの中核館の役割も果たし、地域資源の中心も果たそうというのは、普通は中核館とエコミュージアムのコア館は別々につくる。また、申し訳ないが日本ではエコミュージアムは成功した事例が少ない。試みた時は新鮮だと感じたが、現実にはうまくいっているところは少ない。それをやろうとするならかなりの決心をしていただいて、いわゆる中央館をつくるということとは別に、かなりのエネルギーをかけなければならない。そこは選択であろうと思う。文章で書くのは簡単なのだが、「地域資源の中心」と「文化観光の拠点」は結びつきやすいと思うが小田原市は既存の博物館がたくさんあるので、その中核となる施設、中央館というのとはまた違うと思う。中央館というイメージとしては、小田原の基本的なこと、小田原の民俗なり歴史なりがそこに行けばちゃんとわかる。そこには基本的な収蔵資料もちゃんとあって、小田原のことが知りたいと思えば、そこに行けばちゃんとわかるというような、そういう中央博物館をイメージする。

【鳥居委員】 中核という言葉は文章であると読んでしまうのだが、「既存の博物館施設の中核」という言葉は、これは現実的に言えば図書館や文学館も博物館的施設とされている。図書館と博物館はまったく性格も機能も違う。機能が違うところ、天守閣もそうなのだが、そういうところの中核になり得るといえるのはどういうことなのか。実際に運営するときにならぬのか、私にはわからない。

【友部生涯学習課長】 前回の会議でも図書館と博物館は違うというご指摘をいただいたと思う。ただ、博物館的な要素が図書館の中にもあるため、連携してやっていく必要があると考えている。

【鳥居委員】 それは連携である。中核というのは、中央館として存在して、職員の配置や資料の保存、保管等を中核となる館が中心となるという印象があるのだが。情報は中核館に行けばわかるというやり方もある。恐らくコストもその方がずっと安くなる。いまの時代、他の館の情報を画像付きで持つのは、相互連携は可能であるので、そういう時代に中核というのは人事等をつかさどるといったイメージがある。中央という使い方と今のお答えでは違ってきていると感じる。きちんと基本構想の中でこういう意味があるのだということがわからないと、あとで様々な解釈に変更していく恐れがある。私

は機能が違う館を抱え込んでしまう方が大変だと思う。また、尊徳記念館は個人を対象にした展示をしているため、資料を抜かれてしまっただけでは運営に困ると思う。並列で存在していて情報は一元化するというやり方でも充分にいいと思う。そうなると書き方は情報の集約を行うとか、その程度の方が後の運営が楽になってくると思う。

【友部生涯学習課長】 人事的なものまで博物館に持ってこようという発想はない。どちらかというといまおっしゃられた連携のイメージである。

【鳥居委員】 ここで中核館としての性格という、どういうことをお考えなのか、なかなかわからない。地域資源をつなぐ中心というのは、新しい博物館に行けば、場合によっては自然系のことも必要になってくると思うが、小田原についての情報がすべてわかるよ、ということかと思う。普通そういう施設だと情報集約型の博物館とか、別の言い方でもいいと思う。

【吉良委員】 バランスの良い中央博物館をつくらうとしているのか、それとも既存の施設がいろいろあるからその中心、中核としてという意味合いなのか、それによって全く違う博物館ができることになる。やはりこの地域の中央博物館として展示をやり、すべての機能をバランスよく持つことが必要だと思う。

【中村委員】 そこがまず必要であると思う。

【吉良委員】 小田原市にはそうした施設がない。

【中村委員】 基本的な資料があり、展示のある施設か、エコミュージアム的な情報をつなぐ回廊をつくる博物館なのか。二つの意味でなかなか整理はされないの、どちらかを選んだ方がよいのではないか。色々な博物館はあるが、中央博物館的なものはないのでつくらう。その中央博物館がほかの博物館の情報や色々なものをネットして、連携しながら活動していくということであればシンプルである。そこに地域資源とか、エコミュージアムということが入ってくるとどうやってそうした要素を入れていくかということ、どこにアクセントを置くかがあいまいになる。私は当初、中央博物館をつくるというイメージだった。郷土文化館の移転問題や資料の問題があるので、ちゃんとした市立博物館を整備していこうと。ただ、お話を聞く中ではそうでない要素が入っていた。小田原方式として中央博物館をつくらうということよりも、ネットワーク型を選択するという考え方もおありなわけだから、私たちとしてはどうやって答申するかということかと思う。どちらもあり得ると思う。

【矢島委員長】 いわゆる中央博物館をつくるという過去に打ち出した方針ではなく、今までの議論の内容を案分して平らに書いてあるので、そのあたりは確かに見えにくくなっている。

- 【吉良委員】 どの方式を取るのかによって、具体的に学芸員を配置する時に影響が出る。人員を増やすのかこのままでいくのか。最後の段階でこの問題が出てくると思うが、市としてはどうしたいのか。
- 【中村委員】 大きな市なので、やはり基本的な中央館を置いたほうがよいと思う。郷土文化館を拡大して充実させた博物館をおつくりになって従来あるものをネットしていくというのが基本なのではないかと思う。地域資源も新たな考え方であると思うので、地域資源の情報を博物館が少し持つとか、ネット上では情報発信するとか、地域資源について博物館のホームページから入れるとかいろいろやり方はあると思うが、新しく作る博物館は中央博物館というちゃんとしたものをつくったほうがよいのではないか。大きな都市では皆、設置している。そうしたものをまずはつくっていただいて、という感じがする。
- 【友部生涯学習課長】 理想はそういうところにあると思う。ただ、調整の中で一人二役三役させないといけないような状況にあるため、可能な限り持たせたいと考えている。ただ、全くフィフティフィフティなのか、どちらかに重点を置くのかバランスはあると思う。単館のみの話は難しいと思う。
- 【吉良委員】 現場で実際に働いている人たちの意見はどうなっているのか。中央博物館をつくろうということになっているのか。
- 【中村委員】 かつての構想は中央博物館をつくろうとしたものに読める。だが、その後変わってきていると思う。それは市としての行政の方向性かもしれないが、そういう要請があれば議論をして入れましようとなればそれはいいと思うが。
- 【矢島委員長】 中央博物館としての役割をもう少し明確化して、文章を修正していくと。ただ、資料の散逸を防ぐ等の役割は持たざるを得ないと思う。このあたりの書き方は、鳥居委員のご指摘にもあるような、文章の最後のところの言い方も含め、構想としての体裁を整理していく必要があると思う。機能活動のところもどこが特徴となるか、地域における研究の蓄積、あるいはそうした人々の掘り起し、支援、組織化を強調するというのが特徴として挙げられると思う。平塚市博物館等が伝統的におやりになっていると思う。来館者が博物館の提示するものを受け取って帰るのではなく、博物館と地域の人たちで新しいものをつくりあげていくということをもう少し具体的に考えていく。そういうものを入れられるように整理をしたい。時間も押しているが、「5 博物館の施設・立地」について事務局より説明いただき、時間の許す限り議論したい。
- 【友部生涯学習課長】 資料 1 の 7 頁をご覧いただきたい。「5 博物館の施設・立地」については、「4 博物館の機能・活動」を受けて、それを果たし得る設備、場所

が求められるため、特に影響を与えると思われる「4(5)連携の推進」を考慮した内容となっている。具体的な用地は決まっていないことから、どのような要素が必要かという視点での記述となる。まず「5(1)施設」については、中核施設と既存施設のネットワークで、本市の博物館機能を構成するという考え方から、他の既存施設では持っていない、中核施設で備えるべきものについて、優先順位の高いものから3段階に分けて述べていく構成とした。優先すべきものとして、公開承認施設の要件を満たす展示施設、温湿度管理のできる収蔵庫、回遊を促す情報発信の場の3つを挙げている。次に、学習の場の確保のため、講堂や体験学習室等を挙げ、併せて、これらが学校教育での利用を想定したものである必要について述べた。最後にカフェやミュージアムショップ等、利用者のための便益施設について検討する必要がある旨を述べている。

「5(2)立地」については、基本的に平成6年の提言書の内容を継承し、市民が利用しやすい環境であること、また、今回の構想の大きな柱である既存施設の中核と地域資源とつなぐ中心ということから、交通の利便性について配慮すべきであることから、小田原城址公園周辺を候補として考える旨を述べている。ご説明は以上である。

【矢島委員長】 こちらについてご意見等あるか。前の方の問題はいくつもあるのだが、基本的には中央博物館的な、あるいは中核館的な性格をもたそうということで選定するとすれば、どのような設備が必要か。基本的な設備はわざわざ名前をあげなくても皆様ご承知と思うが、問題は規模がどの程度のものになってくるのかということかと思う。例えば設備の整った収蔵庫をつくったとして、既存の物をすべては収蔵できないとなった時に、それでよいのかということと、具体的に数字をあげることは難しいと思うが、この程度は必要ではないかという想定はできると思う。

【鳥居委員】 どこでも向こう何年かという想定をして、実際はそれまでに埋まってしまっている。現時点での想定をすることは可能だが、資料の置き方や、むしろ基本構想の場合は資料別の収蔵庫はちゃんとつくろうとか、そういうことを書くことの方が重要だと思う。立地についても問題解決の要素を反映させるのであれば、駐車場が必要であるとか、そういったことを基本構想では押さえるべきである。

【矢島委員長】 機能的なことを考えれば、利便性を考慮した公共交通機関の接続もさることながら、駐車場の確保が大きな要素になると思う。施設的な問題で言うと、具体的な用地が特定されているわけではないので、小田原近郊の地域の特性を考えるのであれば、可能であれば津波等の被害の及ばない標高を確保するということと、塩害に対する特別な配慮が必要であるということ。

そうしたことは入ってくると思う。収蔵庫は鳥居委員の言われるようにどのような種類のものを設置するか検討していただく。体験学習室等々、学級あるいは学年が収容できるような大きさのものという具体的なものも若干押さえていくと。これは言わずもがなだが、既存の博物館施設は重文の公開承認施設はないのでこれは必須となる。なくともやっていけないことはないが、これがないとある程度の規模の特別展を企画しても、重文国宝が扱えないところとなると制約をうけることがあるため、是非必要と思う。

【中村委員】 今までのお話からすると、市民のための部屋を設置してはどうか。市民が自由に使える、議論をしたり、調べものをしたり、学芸員に質問したりできるような。全体に市民参加ということがあまりうたわれていないのだが、どのような博物館をつくるかというときに、市民参画は必要であるから。市民が自由に入出入りして調査したり研究したりできるような場所を市民参画という観点から入れたほうがよい。催しは既に実施しているので。

【鳥居委員】 資料を見て思うのが、章立てが通っていない。市民参画を大切に思うなら、4の機能活動のところ市民参画型の博物館にするとか、そういう項目を立てないと、ただ市民のための部屋をつくらうと言っても、やはりどういう目的があって、どういう理念があってこの施設が必要なんだという構想にすべきと思う。いまの時代、市民参画もそうだが、学校連携もきちっと考えていかないと、学校は忙しくてなかなか来られないという指摘もあるのだが、だからこそきちっと対応するということが必要だと思う。そういう押さえがあって、体験型の展示にしようとか、体験を行う部屋が必要だとか、次の考え方に発展していくと思う。併せて、博物館の機能・活動という書き方だが、柱のうち4までが博物館の機能が書かれているが、5の連携の推進とあり、ここも何を重点に置いていくのかということも考えていかないといけないと思う。例えば連携の推進ということは、市民参画の促進という書き方がわかりやすいと思う。教育普及、展示、保存といった書き方もあると思うが、これについてももう少しどういうことを目指すのかということがわかるような書き方にしないと、博物館の教科書をそのまま書き写したような調子になってしまう。学校連携を強化するというようなことは、博物館の活動としてはひとつの方向性を示すようなものになってくると思う。学校連携は非常に重要だと思う。私が勤めている博物館は入館者の7割近くが学校利用である。ただどういう利用のしかたかというと、学校に連れられて来られる。子ども同士がなかなか来ない。子ども同士が来られる博物館というのは重要になってくると思う。子どものときに博物館の楽しみを体験していないから、20代30代が博物館に来ない。

博物館の面白さに目覚めるのが定年後である。面白さをもっと早い段階で分かってもらうことが重要であると思う。入館者の分析は非常に重要で、30代の後半から40代の前半はなかなか来ない。子どもが小さくて、博物館に子供を連れてくることに抵抗がある。ではその年齢層の人に来てもらうにはどうしたらいいかを考えることも重要であると思う。そういった対策を考えるのが基本構想であると思う。

【吉良委員】 これからの博物館は柔軟な発想が必要となる。文章の中に博物館法のキーワードがいろいろ出ているが、むしろもっと独自の言葉で表現した方が、市民も読んでわかると思う。

【鳥居委員】 そう思う。情報発信を主にするのなら、展示にくっつける必要はないと思う。この展示・情報発信というのは、これをセットにするのは必然性がない気がするのだが、この文章を読むと、情報発信は「資料閲覧やレファレンス等を通じて」とあり、これは展示とくっつける必要性は全くない。であれば、情報発信に力を入れますと、そうしておけば観光客を対象としますというような項目は必要なくなってくると思う。情報発信は市民だけではなくて、小田原を訪れる人たちにも満足してもらうというようなことに力を入れますというようなことがいいと思う。

【中村委員】 今は施設の話であるから、必要があれば戻ればよい。あとはバリアフリーのことである。バリアフリーも、身体的なバリアフリーだけでなく、文化や環境のことも考慮すべきである。展示も多言語化する等、単純なバリアフリーでなく、多様な人々を、文化も年齢も言語も身体も、多様な方々に対応できる博物館を理念化しておく、具体になるので入れておいた方がよい。それにそって展示を考えると、どの言語で展示するのか。5カ国語、6カ国語で対応しているところもある。また、パンフレットを作る等の対応もある。小田原にどの程度外国の方が来るのかということもあるが、基本構想には一言くらい入れておいた方がよいと思う。

【鳥居委員】 私の勤めている博物館で平塚の盲学校とやり取りがあり、点字の解説を作成した。博物館は資料を見て理解するものという思い込みがあるが、盲学校の教員の方や生徒に触って物の形がわかるものを用意するのはどうかと提案したときに、博物館という施設を理解したいという要望があり、博物館がどういう施設なのかを理解するためのものを用意するとなった時に、触れる資料だけというと、土器とか陶磁器くらいしかない。陶磁器にしても中世の物は資料の安全を確保するために用意していない。複製を用意し、形と材質がわかればイメージできるので、最初からそういったものを用意しておきますと言えば、この博物館に来てよかったという人はたくさんいると思う。

- 【吉良委員】 ハンドオンとバリアフリー等、いくつか理念的なことを施設と立地のところに書いておくと、豊かになるような気がする。
- 【鳥居委員】 バリアフリーというよりはユニバーサルデザインということだと思う。
- 【吉良委員】 新しいものをつくるが、数十年後には満杯になることが想定される。それについても触れておいた方がよいのではないか。福島の考古に特化した博物館では、既設館の横に広い空き地があり、将来収蔵庫を増設するために確保している。一杯になったのかどうか知らないが。
- 【矢島委員長】 震災の受け入れがあったのでほぼ一杯になっている。ただ、あそこは博物館という名前にはなっているが、行政的には埋蔵文化財センターである。
- 【吉良委員】 そこまでの要望はしないが、満杯になることを見越して、未来志向で考える必要がある。これは施設立地のことである。
- 【中村委員】 5年に一回は必ず展示を見直すといったことを入れてはどうか。どうしても展示というのは放っておいてしまう傾向がある。皆さん色々思いがあるであろうから、それを発言して、欲張って入れていってはどうか。すべてが実現はしないと思うが、希望としてあげていっては。
- 【石原委員】 ひとつよろしいか。施設についてだが、デジタル化について前もって構想をしておいたほうがよろしいと思う。いまはデジタルミュージアムは当たり前であるので、それに相応した施設を、出来てからでは間に合わないのだ。それからもうひとつ、市民参画についてのこれまでなされた議論の中で、私が面白いと思った事例が、外国の事例なのだが、展示の企画を住民と学芸員と一緒にやって、その成果を展示している。それくらいであれば日本でもあると思うのだが、その議論をビデオで撮って全て公開をしている。それを冊子にして販売をしていた。アメリカの事例で、マイノリティに関する展示だったのだが、マイノリティの方たちを呼んで学芸員と何を展示するかという丁々発止の議論をビデオに撮り、編集はあると思うのだが、一緒に公開をしていた。とても関心を持った記憶がある。私は現職の時に公文書館だったもので、市民あるいは県民と一緒に展示ができればいいと思いつつ実現はできなかったが、市民参画ということはそこまで広げられることを検討していただければありがたいと思う。
- 【中村委員】 デジタル化の手法を使えばやれることがいろいろ増えると思う。やはり展示できることには限りがあるので。特に地域資源のことはデジタルミュージアムの手法で広がりが出ると思う。
- 【石原委員】 それと「おわりに」のところなのだが、公文書のことを今回は扱わないという整理でこうした表現になったと思うのだが、残された課題として認識すると、市史編纂の資料として残された公文書だけではないということ。これはこの会議の中で私も何度か申し上げたが、公文書というのは地域の

資源であるという認識に立っていただければ、ゆくゆくは小田原の情報資源、あるいは重要なアーカイブズとして保存されるべきものとして認識したということをここで述べて、現状ではここに触れるのは難しいので残された課題として記すという文章にさせていただければありがたいと思う。

【矢島委員長】 まだご意見はあろうと思うが、いただいたご意見からすると、頭の方からかなり手を入れないと全体の整合が取れないということになると思う。殊にユニバーサルデザインのことは施設立地に大きな影響を与えると思う。また、市民参画についてもどこまで入れていくかということがあると思う。今日の議論を踏まえて作り直していただき、次の議論につなげたいと思う。「はじめに」から「施設立地」までの間、それを超えても結構だが、お気づきの点があれば、次回の会議までの間でも事務局にメールでご連絡いただければと思う。

【友部生涯学習課長】 いろいろとご意見いただいた市民協働や学校連携等の点について事務局としては薄く広く書いたつもりでいたのだが、見せ方をわかりやすく調整したい。構成についても、時間的制約もあるのでどこまでドラステックにできるかわからないが、可能な限りいただいたご意見を整理して、訴えかけやすい形に修正したいと思う。またお気づきの点についてご連絡いただければ、そのご意見を反映して、次回お示ししたい。

【矢島委員長】 それでは本日の会議はここまでとする。